

童話 王女の猫の話

— カレル・チャメック —

四 ホール探偵の話のつゞき

『そこで僕はアレクサンドリアから、今度はボムベイへ向けて出發した、インドの王子様さいふ變裝でネ、そいつが、

諸君、またよく似合ふのさ。こころがある日、僕が船室でウツラウツラしてゐるさ、突然扉をノックする奴があるんだ。立つて扉を開けてみた——が廊下には人の子一人見えないぢやないか。僕は一寸立つて様子を見てゐた、するさふさ二人の船員が近づいて来る足音が聞えて来る。しかも一人の男がヒソヒソ聲でオイ、あの王子をやつゝけて、眞珠ダイヤモンドをみぐるみ頂戴しようぢやないか、と言ふ聲が聞えるんだ。こころが諸君、アバヨ、僕の眞珠、ダイヤモンドミ來た日にはみんな硝子玉なんだからな。するさ

中野好夫譯

相手の男が、一寸待つてくれ、俺は上の室にナイフを忘れて來た、そういつてナイフを取りに去つた様子だ。その間に僕は残つた野郎の首つ玉をいきなりグイミ捉へて、猿轡をはめた、それから此奴にすつかり王子の服を著せるさ、ガンヂガラメに縛り上げて僕の代りにベットの中に寝かせて置いた。そこで僕の方が奴の服を失敬して、扉の外に立つてゐたもんだ。ナイフを取りに行つた野郎はまもなく歸つて來た。僕は何食はん顔で、オイもうあの王子を殺害するのは止さうぢやないか。俺がもうチャンシ一絞めやつゝけたよ。番をしてゐるから、早く入つて寶石を剥ぎミつて來なよ、ミこう言つてやつたんだ。

『其奴が船室に入るが早い、僕はいきなり閉めこんでお

いて、船長の所へ行つた。そして、船長、私の所へ妙な來訪者が御座いますしてネ、ミそう言つてやつた。船長はすつかり事情を聞いて、結局、二人の奴はひびくひつぱたかれた、そこで僕は皆を集めて、言つてやつたもんだ、ホーラ見ろ、諸君、賢明な人間は眞珠、ダイヤモンドなんて物に心を奪はれるやうなもんぢやないんだ、ホラヨッミ、さうだ、僕は硝子玉の寶石を一つ残らず海に投げこんぢまつた。サア、これからつてもものは、奴さん達僕にベコベコ頭を下げる。オ、偉大なる王子様つて按排でネ、だがそれにしても僕の室の扉をたゝいて、生命を救つてくれたのは何處の誰れだか、わからない。ミころでも一つこの大きい美味そうな奴を一つ頂戴しよう。』

ホール探偵は食べ終らないうちに、まだ口に一杯頬張つたまゝ話をつゞりました。『そんな風で無事ボムベイに著いた。諸君、インドさいふ國はミにかく大きな妙な國だよ。なにしろ恐ろしい暑さで、河も何もカラカラだ、蒸發してしまはないように始終水をぶつかけてゐるやうな始末だ。その代りには、一度雨が降りや、何もかにも途方もなくム

クムク伸びちまふんだからな。教會堂なんぞでもまるで茸か何ぞのやうに地面からモクモク生えて來るんだからネ、だからだよ、早い話がベナレスにあの澤山教會があるつていふのは、それからまだ僕等の國の丁度雀のやうに、こゝでは猿がウヂヤ／＼して居る。だがすつかり人間に馴れたもんで、寢臺の上までノコ／＼上つて來る。うつかりするミ、朝なんぞ目を覺まして見るミ、肝腎な人間はベットに居なくて、猿が代りに寝てるたなんて、まあ此奴等はそれ位人間には馴れたもんだ。それからその次は蛇だよ。こいつがまた恐ろしく長い奴で、例へば自分の尻尾を見ても、そいつが自分の尻尾だミは思へないんだ。誰れが他の自分よりも大きな蛇が後から追駈けて來るんだミ、まあそう思ふんだな、そこで奴さん無我夢中に逃げ出しちまふ、結局は自分で自分に追駈けられて、可哀相に死んぢまふていふ譯さ。だが、そうだ、僕はあそこに住んでゐる象の事を話さなかつたネ。ミにかくインドで國は大したものだよ。』

『僕はそこでボムベイからまた電報を打つた。それから暗號の手紙ミ、ナニこいつは魔法使ひに何か僕が大變な計畫

でもあるかのやうに見せかけようつていふだけの事さ』。

『あの手紙は一體何が書いてあつたんだ。ミ探偵達は不審氣かしげに申しました。』

『僕は今もう半分だけは解けてるんだが』

中には得意らしく言出すものもありました。

『ホ、ウ、ぢや君達は僕より賢いつていふ譯だ』『ホール君は申しました。』だつて第一僕自身讀めないと思つてるんだからネ。ナーニ、要するに暗號らしく見せる出鱈目にすぎないんだよ。それからボムベィからは汽車でカルカッタへ行つた。インドぢや汽車の中は座席の代りに御風呂がある、餘り暑苦しくならないやうにこいふんだネ。森や沙漠を通つた。叢林の中で恐ろしい虎の眼がキラキラ光つてるたし、河の淺瀬には白い象が涼しい眼をしてじつと僕等を見てゐた。山鷲が僕等の汽車を掠めて舞ひ上つたり、七色蝶々がヒラヒラ窓から舞ひこんで來たりもした。諸君、つまり僕は行く先き先き到る所で魔法使ひのゐるのが判つてゐるんだ』。

『カルカッタの近くであの聖淨なガンヂス河の畔へ來た。

恐ろしい廣い河だつたつけ、投げた石が向ふ岸まで行き著くのに一時間半はかゝらうこいふんだからチ。丁度僕等の汽車が河岸を走つてゐる時だつた、一人の女が岸で洗濯物をしてゐるが、さうした機みか、前のめりして、そのまゝ河の中へ落つこちてしまつたんだ。サア溺れさうだ。僕はいきなり全速力で走つてゐる汽車から跳び降りて、その女を岸に引上げてやつた、ナーニ、勿論諸君だつてきつこやつたらうこさ』。

探偵はみんなそれはそうだこいつた様な顔をしてうなづきました。

『だが實をいふと、こいつは仲々うまく行かなかつた。こいふのは、僕がその女を抱えて、水の中でもがいてゐる時に、あの鰐の畜生が見つけた。そしていきなり僕の手を猛烈にかんだ、なんこか女の方は岸にいたが、肝腎の僕はそのまゝ氣が遠くなつてしまつた。それから四日間こいふものこのインド人の女が僕を介抱してくれた——早く言や、諸君、この金の指輪がつまりその時の思ひ出だよ。要するに世界中でこの人間だつて恩は知つてるこいふこさだ

ネ、眞黒な野蠻人にしてもだ、結局僕等ミ何の變りもない
こいふこいだよ。』

『だが、お蔭で僕は五日間の損をした。河岸に立つて考へ
たネ。こいつは四十日ぢや一周できない。畜生!! 一萬圓の
賭けも、梨の實もすつかりフイになつちまつた、ミそんな
こゝを考へてゐるミき小さな船が一艘やつて來た。あのジ
ヤンクつて奴だネ、艇の帆をあげて、船の中には薄汚いマ
レイ人が三人乗つてゐたつけ、まるで噛みつくやうな白い
齒を剥いて僕に何か言つてゐるんだ、ニア、ナニア、ブケ、
ナガサキ、そこで僕は叫鳴つてやつた。この乞喰野郎!! 貴
様等の言葉が俺にわかるミでも思つてゐるのか、!! ニア、ナ
ニア、ブケ、ケム、ナガサキ、相變らずやつてやがる。それ
でも御愛嬌のつもりなんだらう、ニヤニヤ笑つてゐるんだ、
だが僕にも長崎だけはわかつた、だつて僕がこれから寄港
するはつの日本の港の名前なんだからネ。で僕は、そんな
お椀みたいな船で長崎へだつて、馬鹿も休み休み言へ、ミ
叫鳴つてやつた。だが奴さん達は相變らず分らない事を喋
舌りながら、船を指したり、天を指したり、それから自分

の胸のあたりを指さしたり、さうやら自分等に從いて來い
こいふ身振りらしいのだ。梨を山盛り貰つてもいやなこつ
た、僕も相變らず頑張つてゐるが、するミさうだらう、奴
等いきなり僕に躍りかゝつて、否應なしに僕に筵をグル
〜巻きにしてまるで荷物か何かのやうに船の中に投りこ
んでしまつた。ミにかく僕も面白くはなかつたが、到頭筵
包みのまゝいつか眠つてしまつたらしい。フト目を覺まし
てみるミ、船の中にはゐなくて、チャンミ陸に上がつてゐ
るぢやないか。そして僕の頭の上には大きな菊の花が一つ
咲いてゐる。なんミあたりの樹立はみんな美しい漆塗りだ、
岸邊の砂は一粒一粒洗ひ立てたやうに美しい、何もかも清
淨そのものだ、そこで僕は、ハハア、こゝは日本だなミ思
つた。するミそこへ黄色い顔をした男がやつて來たから、
僕は、恐れ入りますが、こゝは何處で御座いますやうミ、聞
いてみた。男は大聲に笑つて、ナガサキですよつて言ふぢ
やないか。』

『で諸君』ホール探偵はつくづく申しました『僕は馬鹿ぢ
やないつもりなんだが、一體あのボロ舟でたつた一晩でカ

ルカッタから長崎まで著いたつていふのは、こいつだけは
ぎうしてもわからない、なにしろ、そんな速い船だつて十
日はかゝるさいふんだからネ——それはこにかくこいつを
も一つ頂戴しよう』。

丁寧に皮を剥いて、梨を食べてしまふこ、『日本つて國が
また面白い國だ。おそろしく愉快な器用な人間のゐる國で
ネ、目にも見えない薄い瀬戸物の茶碗を作つてゐた、ヒヨ
イミこう親指をたて、そいつをクルクル廻す、その上にチ
ヨイチヨイミ繪具を塗るこ、それでもうすつかり茶碗が出
來上つてゐる。僕の見たある繪描きなんぞは、誤つて筆を
紙の上に落したもんだ、するこ筆が自然ひじりてに轉がつて、家が
出來る、樹立が出來る、歩いてゐる人間の形になる、みるみ
る立派な風景畫になつてしまつた。僕が呆氣にさられてゐ
るこ。その繪描きがいふこが面白い。私の師匠の仕事に
比べれやこんなのは何でもありませんや、師匠なんぞはあ
る日雨降りに草履を泥で汚しました、こころがその泥が乾
いてみるこ、なんこぎうでせう、片方の草履には狩人が犬
を連れて兎を追つてゐるこころ、今片方には子供等が學校遊

びをしてゐる繪が、見事に泥で出來上つてゐるさいふんだ
からネ』。

『その次は長崎から船で、サンフランシスコに向けて出發
した。この航海ぢや別に不思議はなかつたが、その代り肝
腎の船が難破してドン／＼沈みはじめた。僕等は急いで救
命艇にミびのつたんだが、ボートが丁度一杯になつた時だ
つた、沈みかけてゐる本船から船員が二人大聲で叫鳴つて
ゐるんだ、女が一人残つた、何んこか詰められないか、ミ
そう怒鳴つてゐるぢやないか。

『駄目、駄目出來ない、出來ない、誰れか僕のボートから
怒鳴つた奴がある。だが僕は直ぐさま、大丈夫だ、その女
のをせてくれ、ミ怒鳴り返してやつた。するこ皆はその女
の席をこさへるために寄つてたかつて僕を海の中に投げこ
んでしまつた。だが僕は別に恨みはしなかつた、いつだつ
て女はさきにしてやるべきもんだからネ、さて本船が沈ん
でしまふこ、ボートも何處かへ行つてしまつた。僕はたつ
た一人大海原の真中にボツンミ残されてしまつた譯だ。仕
方がない、板子一枚にのつたまゝ波に搖られてゐた。濡れ

さへしなければ大して悪い氣持のものではないんだが、
さにかくそんな風で、一日一晚流れてゐたが、僕もこいつ
はいよく駄目かなと少々心細くなつて来た、丁度そこへ
小さな箱が一つ流れて来るぢやないか。開けてみるに中味
はなんも火花が一杯つまつてゐる。』

『火花なんぞ今更さうしろさいふんだ。梨の實ならまだし
もなんだが、僕も最初はわからなかつたが、やがて漸く意
味が讀めて来た。で僕は眞暗な夜の闇がやつてくるに、ま
づ一本打上火花を飛ばしてみた。恐ろしく高く揚つた。そ
して流星のやうに尾を曳いて光つた。その次の奴はお星様
のやうに光つた、三番目のやつは太陽のやうだつた。四番
目はまた美しい歌を歌ひながら飛んで行つた、一番お仕舞
のやつはまた餘んまり高く揚つたもんで、お星様の間に突
き刺さつてしまつた。そうだ、そのまゝ今でも光つてゐる
ぞ。そんな譯で面白半分ボン／＼やつてゐるうちに、やつ
と大きな船がやつて来て、僕を救ひ上げてくれた。ミこころ
で船長が僕に言ふには、その火花がなかつたら、あなたも
御陀佛でしたらうな、私達はその火花が十哩も空に上つて

光るもんで、こりや誰れか救助の合圖をしてゐるのに違ひ
ないに、そう思つてやつて来ましたよつてね。ミこころであ
の親切な船長のためにもう一つ。』

また一つ梨を食べるに、話はつゞきます。『いよく／＼サン
フランシスコからはアメリカの土を踏むさいふ譯だ、諸君
は、なにしろアメリカは僕の故郷だ——そうぢやないか、
アメリカは……そうだ、やつぱりアメリカだ。僕がいくら
アメリカの話をしても君達は信じない。なにしろ途^{さて}徹もな
い面白い大きな國だからな。だがこれだけ言つておこころ、僕
は大陸横斷鐵道に乗つてニューヨークへ来た。こゝは途^さ方
もなく高い家が澤山ある、いつまで経つても出来上らない
んだ、なにしろ煉瓦屋だの石屋だなぎが一等下から階段を
上つて、頂上^{てつべん}まで登り切らないうちにお晝だ。仕方がない
からそこでお辨當にする、そして晩には降りて来てベット
で眠らなければならん、まあそんな風で毎日々々やつてる
譯さ、だがアメリカは素敵なものだぜ、僕がアメリカを愛
するやうに、さういふ祖國愛を知らない奴等なんて、さつ
とさき馬にでも蹴られて仕舞へだ!!』

『アメリカからまた船で、オランダはアムステルダムへ来た。そうだ、その途中だった、ミても愉快なこじが起つた。まあ旅行中一等愉快な思ひ出だな』。

『なんだい、そりや一體探偵達は膝を乗り出しました。』

『ウン、そりや』ホール探偵は何故か顔をボーツこ赤くして『僕が婚約をしたこいふこじだよ。實はその船にお嬢さんが一人乗り合せてゐた、美しいお嬢さんだつた。名前はアリスミ言ふんだ。あんな奇麗なお嬢さんてのは世界中鐵の草鞋わらじで探しまはつてもめつかるもんぢやない。ナーニめつかるもんか』ホール君は恐ろしく眞剣な顔をして申しました。『だが待つてくれたまへ、僕は決してお嬢さんはお美しく御座いますなんて、そんなこじは言やしない。それはもう航海もいよく今日限りだこいふ日だつた。勿論まだ物一つ言つたこじもなかつた。——こころでも一つ頂戴しよう。』

食べてしまつて美味そうに舌打をするこ、また話のつきでした。『その最後の晩だつた。僕が甲板を歩いてゐるこ、不意にアリスさんの方から僕の側へやつて来て、こ

言ふんだ。シドニー、ホール様、あなたはゼノアへいらつしやいませんでしたか、つてネ。僕は、勿論エ、参りましたこ言つた。するこではゼノアで母親を見失つた哀れな少女を御覽になりませんでしたか、こそう聞くんだ。エ、そりや見ましたがネ、馬鹿な奴がゐて、その少女に手を借してやりましたつて。

『アリスさんは一寸黙つてゐましたが、それからまた、ではインドへもいらつしやいませんでしたか。ア、参りましたよ。ではもしや大層勇ましい青年が全速力で走つてゐる汽車からガンヂス河へ飛込んで、洗濯女の命を救つたのを御覽になりませんでしたでせうか。僕は少々閉口したが仕方がない、ハイいかにも見ましたがネ、お嬢さん、大方ここの馬鹿者でせうよ。利口な奴ならあんな馬鹿な眞似をするもんぢやありませんからネ、こ答へておいた。』

『アリスさんはまた一寸黙つたが、やがてこう何か僕の眼を不思議そうにのぞきこむやうにして、では私こんな話を伺ひましたが、それは海の中で溺れかゝつた女の方を満員のボートに救ひ上げるために自分自身は犠牲になつて海

に飛込んでお仕舞になつたなんでも大變立派な方がおありになつたミ、そんなお話なのでありますが、ほんさうで御座いますか。諸君、もう僕はすっかり血が頭へ上つてしまつた仕方がない、僕は言つた。そりや成程、先日きこかの馬鹿者が海の中へノコノコ飛び込んだちまいましたガネ。

『するミアリスさんが僕の兩手をこつて、真赤になつてこ言ふのだ。あなたは素晴らしい親切な方ですわ、お判りになりました。あなたがゼノアの少女や、インドの洗濯女や、また知らない婦人にしておやりになつた親切、そのためにきつミ世界中の人があなたを好きになるに違ひありませんわ。』

『ところで諸君、その時、神様が、いゝね、神様が僕の後から僕をお突きになつた、で僕は思はずアリスさんを抱きしめて、まあ結局そんな譯で婚約まで行つたさいふ譯なんだガネ。そこで僕は聞いてみたんだ。アリスさん、こんなくだらない僕の話を誰れがあなたにしたんです。僕、金輪際、他人に自慢して話した覚えなんてないのですがネ。』

『さうなんですの、アリスさんは言つた。今夜私が海を眺

めながら、あなたのこミを考へてゐるミ、黒い服を着た小さい女の方が私の側へ来て、すっかりあなたのこミを聞かせて下さいましたの。そこで僕はせめて御禮でもこ思つて、後でその黒い服の女さいふのを一生懸命に探したんだが、到頭姿さへ見つかからなかつた。まあそんな譯で僕は船中で婚約してしまつたんだが……ミ、ホール探偵は長い話を結んで、キラキラ光る眼を押し拭ひました。』

『ところで肝腎の魔法使はさうしたんだ』
探偵達は大聲で申しました。

『ナニ、魔法使ひ？』世界的探偵、ホール君は申しました。『彼奴は要するに豫想通り自分で自分の好奇心の良にかつたさいふもんだ。僕がアムステルダムに泊つた晩のこミだ、僕の部屋の扉をノックして入つて來た者がある。ホール様、ホール様、私はもう何ミも我慢が出来ないのですが、さうか後生ですから、一體さうして私をお捕へになるつもりか話していたゞきたいミ、さう言つて來たんだ』。

『僕は嚴かに言つてやつた。魔法使君、まあ御免蒙らう。もし僕がそれを君に話せば、折角の計畫を相手に知らせて

仕舞ふこいふもんだ、そして君は逃げて仕舞ふだらう。』

『するま魔法使は苦しさうに言ふんだ。さうか御願ひで御座いますから、私を可哀相だと思つて下さい。私は好奇心のためにもう夜も眠られないので御座います。さうかほんこのまごころを御聞かせ下さいませんか。』

『成程、分つたかい。僕は言つてやつた。ちや言つてやらう。だがその前に今この瞬間からお前は俺の囚人だぞ、決して逃げは致しませんま、誓言するか。』

『誓言致します。彼奴め大聲で叫んだ。』

『おい魔法使ひ、私はスックミ立上つて言つた。今こそ俺の計畫成就だ。言つてきかせてやらう、俺はたゞお前のその好奇心一つを當にしてるのだ。海の上でも、陸の上でも、お前は俺の心を探らうにして、いつでも俺の側にゐるのをチャンミ知つてゐた。最後には、そうだ、今のお前のやうに、俺の前へ来て、なんの事はない、自分の好奇心につられて、お前の自由を失つてしまふこゝになるんだま、チャンミ俺は知つゝゐたんだ。』

『するま魔法使ひは眞青になつて頭を俯垂れてしまつた。』

そして、あなたは實に恐ろしいひきい人だ、まるで魔法使ひの眼を抜こうさいい人だから、ま僕にさう言ふんだ。でまあ諸君、僕の話はこれだけだよ。』

ホール探偵の話が終るま、探偵等は心から腹を抱えて笑ひました。そしてホール君の幸運な成功を祝福致しました。ホール君は満足さうに微笑みながら、皿の中を美味しさうな梨を探して居りましたが、フト紙に包んだのが一つの梨が眼につきました。ホール君は早速包紙を解いてみるま、中には、『シドニー、ホール様へ、ゼノアの少女より』ま書かれてあります。

ホール君はもう一度皿の中を見ました、成程、また一つ紙に包んだのがあります。開けて讀んでみるま、『御健啖を祈ります、ガンヂスの洗濯女。』

今一つのも開けてみました。『生命の恩人へ心からなる感謝まごにも、救命艇の女より。』

更にも一度、ホール君は皿の中から紙包みの梨を取上げました。『あなたの事を思ひつゞけて居ります、アリス。』

そして皿の中には最後に一つ、大變美しいのが残つて居

りました。ホール君は早速二つに割つてみますよ、果して中からたゝんだ手紙が一枚出て来ました。封筒には、『シドニー、ホール様』とあります。開けてみるの中には、『秘密を有つものは熱病に氣をつけなければいけません。探偵様は氣を失つてガンヂス河の岸で眠つておいでになる間に熱病の謔言ですつかりあなたの計畫を喋舌つてお仕舞ひになりました。これが私の計畫でありました。私はあなたの手に落ちかゝつてゐる懸賞金をフイに致したくはありませんでした。で私の方から進んで、あなたの手にかゝつたやうな譯であります。あなたの御貰ひになる懸賞金はいはゞあなたの結婚に對する私のお祝ひであります』。

ホール君は飛び上るほご仰天致しました。『諸君これで一切分つた。僕の方がさんだ馬鹿者だつたんだ。私がゼノア中を馳けづり廻つてゐる間船の錨をしつかり押へてゐたのも、アラビア人に化けて僕を鰐から救つてくれたのも、二人の船乗りが僕を殺す相談最中に僕を起してくれたのも、みんなあの魔法使の仕業だつたんだ。彼奴は僕がガンヂス河で氣を失つてゐる間に僕の計畫を聞いてしまつた。ジャ

ンクを送つて長崎まで運んでくれた。僕の生命の親だつた花火の箱を流してくれた。黒い服の女に化けてアリスの心を僕の方に向けてくれた、そして最後には自分で進んで、だまされたやうな顔をして私を助けてくれた、懸賞金を取らせてくれたんだ。僕はあいつを出し抜いてやらうと思つた、ところがやつぱりあいつは僕より賢しこかつた、その上僕よりはるかに器量の大きい奴だつた。『魔法使ひ、偉いぞ!! 萬歳!! さあ諸君、僕と一緒に叫んでくれたまへ』。(つゞく)

大阪市保育會主催にて開かれます筈でした全

國幼稚園關係者大會が、關西地方大風水害のため

延期となりました事は御承知の通りでございます

ますが、明昭和十年三月二、三日の兩日に變更開

催される事になつたことのお通知をいたゞきまし

た。本誌からも一言おしらせ申します。